http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/study/komatsushigemi.html

筆者　小松　茂美（こまつ　しげみ）
古筆学　美術史家　1925　**山口県岩国市生まれ**。国鉄マンであった父に従い広島鉄道局に勤務。1951年上京、私淑していた源氏学者池田亀鑑のもとで、学問への姿勢と研究方法を身に付ける。1953年東京国立博物館学芸部美術課に就職。1979年度古筆学研究体系化の業績で朝日賞受賞。主著は『平家納経の研究』。1973年『平等院色紙形の研究』で、「古筆学」という新しい学問を提唱。1976年『平家納経の研究』では、古筆学の方法を駆使して、年来のテーマであった「平家納経」の研究を集大成し、その美術史的位置と歴史的背景を明らかにした。1986年東京国立博物館を定年で退官。2010年5月21日心不全のため死去　85歳没。

「厳島文書」雑翰部（ざっかんのぶ）　所収

5 「手紙によって改名した厳島の黒内侍」

明治二十四年の三月十三日の朝まだき、厳島神社の裏手にある、校倉（あぜくら）造りの宝庫に火の手が上った。幸い早い発見で、延焼も軽度に消火することができた。この宝庫には、かの有名な平家納経をはじめ、今日、国宝や重要文化財に指定されている、秘宝の数々が、収納されていたのだ。奇跡的にも、これらは災火をまぬがれたが、なお、多くの刀剣類や古文書の山を、一瞬にして烏有に帰してしまったのは残り惜しい。

その中に、いまとり上げるこの手紙も交っていた。しかしながら、偶然にも、この手紙は影写（すきうつし）による写しがとられていたのだ。神社では、これら一群の古文書を「厳島文書」と名づけ、雑翰部（ざっかんのぶ）に分類する。この写しはその中の一巻で、巻物に仕立てられている。まず、その全文を掲げる。ふつう、手紙といえば一通にかぎるが、これは珍しく、相関連する大小四通（何れも原文は漢文）で一本の手紙となっている。うち最初の二通を紹介しよう。

(A)安芦備後両国の堺（粟原泊・尾道市）従り、申さしめ候所なり。社頭の儀は、厳重と云い、比興（画白く興味あること）と云い、片時（へんじ）も忘れ難く候ものなり。得道の人に非ずんば、忽ち竜宮に入るが如し。就中、側（ほの）かに御託宣の趣を承り、已に是れ機感の時、至るなり。感涙扣（おさ）え難し。又、内侍等、祗候（しこう）の事、日来（ひごろ）、承り及ぶと雖も、いまだ子細を知らず候の処、容貌と云い、才芸と云い、已に辺土の儀に非ず。尤も神力と謂う可し。其の中、舞妓の事、先人（少納言入道信西）殊に以って賞翫す。而して、平治の乱以後、永く視聴を隔て、今、数年に及ぶ。忽ち往事を見て、懐旧の涙、覚えずしておのずから落つ。かくの如き等の間、重ねて参詣の思い、尤も切に候ものなり。兼ねて又、上下向ならびに祗候等の間、雑事殊に以って丁寧の沙汰に候の条、恐悦極まり無く候ものなり。抑も、内侍等海上に浮き送るの間、帰参の時に及びて、已に別緒の魂を消（け）つ。件の子細は紙上に尽し難く候のものなり。有安（前飛騨守中原）申し上ぐべく候の処、に上洛せりと、しかじか。今日以後、已に浦嶋子（浦島太郎）の往情を知る。此の旨をもって、申し上げしめ給うべく候なり。恐々謹言。

四月十五日　　法印静賢
　　権大僧都澄憲
　　左兵衛督成範

(B)　追って申す。
黒、名を改む釈全。由緒に依り候。猶、改名せしめ候なり。世親と付けらるべく候なり。竜樹・世親は一双の大士なり。彼の両人も同じく一双の美人なり。其の上、故入道(信西)、此の今様を作りて候なり。舟中、この事を思い出し候。尤も哀れに侯。この歌、内侍等に教えしめ給いて、宝前(神社の)に於いて、歌わしむべく候なり。定めて、彼の(信西入道)滅罪の計たらんか。又、此の宿に於いて、志有りて、檀越(だんおつ　布施)のものを給う。仍って、重ねて内侍等に給わるべぐ候なり。其の中、硯一竜樹、裏物(つつみもの　金子〈きんす〉)一世親、各給うべく候なり。彼の申状(A)をもって、必ず必ず、給わるべく候。三人同心に申さしめ候なり。謹言。

久安二年〈一一四六〉、平清盛が安芸守となり、安芸国の一ノ宮である厳島神社を崇敬するようになって、平家一門の栄華がはじまった。妻時子の妹滋子を、後白河上皇の女御(にょうご)として入内(じゅだい)させ、高倉天皇を出産。その高倉天皇には、娘の徳子を中宮として送り込む。そして、安徳天皇が誕生する。清盛は、徳子の妊娠がはじまると、男子の出産を祈念して、厳島神社に月詣で(毎月、日をきめて参拝する)の船旅を繰り返した。後白河法皇・建春門院(滋子)、高倉上皇などを浪の上に誘い、厳島詣でを敢行した。これに釣られて、京の公卿たちも、われもわれもと、厳島の社参に出かけた。昇進が遅れ、悲嘆にかきくれる藤原実定が、はるばる厳島明神に祈誓して、厳島内侍(巫子)の口利きで、左大将の金的を射止めた話は、『平家物語』や『源平盛衰記』にも収められている。二十度参詣の悲願を立てた、清盛の異母弟頼盛が、朝廷公用の儀式をさぼって、厳島に抜け参りして、譴責をうけた話。というように、平家一門の人々と厳島を結ぶ逸話は、いくつもある。

この、(A)・(B)の手紙も、そうした風潮の波に乗った、京都の公卿の厳島詣でを物語る、貴重な資料でもある。さて、(A)の差出人は、法印静賢(ほういんじょうけん)・権大僧都澄憲(ごんだいそうずちょうけん)・左兵衛督成範(さひょうえのかみなりのり)の三人。かれらは兄弟であった。ことに、成範は桜町中納言の異名をとった、美貌の貴公子であった。この手紙には、「四月十五日」の日付けだけあるが、種々の考証から、治承二年〈一一七八〉のものと推定する。

まず、(A)の手紙。何日かの厳島滞在の後、帰京の途に立った静賢ら三人の一行は、最初の寄港地である栗原泊(いまの尾道市)に投錨した。船中、三人は異口同音に、厳島話に花を咲かせた。男三人が寄ると、最後はどうしても女の話になる。それにしても、あの厳島内侍たち、都を発つ時から聞いてはいたが、見ると聞くとは雲と泥。いやはや、あの艶やかな色気には、すっかり参ってしまった。いまはただ、浦島太郎のような気持だ。それぞれが、枕をともにした内侍たちの品定めで、時を移す中にも、船は静かに夕闇に包まれながら港の中に入っていった。その船中浪の上でしたためられたのが、この手紙であったのだ。そうだ、いっそのこと三人連名でいこう。まあ、兄さん、あなたが書いて下さいよ。というので、一座の中で、年長ではあったが、身分のいちばん低い静賢が筆を執ることになった。連名の手紙の差出人は、末尾にいくほど、高位となる。ところが、あて名の方は、最初に最高位の者、つぎつぎに身分が下る。というのが原則であった。この手紙は、どうしたことか、あ
て名を書かない。が、文面の丁寧をきわめることから、おそらく厳島神主佐伯景弘にあてたものであろう。(A)は、まず厳島滞在中の礼状である。(B)は黒内侍改名の依頼状である。文意は、さきの読み下し文によって、およそをつかめるであろう。当時、厳島神社には、大勢の内侍がいた。神役を奉仕するかたわら、夜に入ると、参詣の貴族の宿所に出向いて、娼(遊女)を兼ねる。中には、清盛の寵を受け、その間に一子をもうけ

たのもいる。やがて、かの女は越中前司平盛俊に再婚する。盛俊戦死の後は、鎌倉方の武将土肥実平の妻となった。ところで、かの女の生んだ女子は、母親ゆずりの美貌で、安芸御子姫君と呼ばれ、後には、とうとう後白河法皇の後宮に入内する。というような、ハピーエンドの生涯を歩んだ女もいる。

治承元年〈一一七七〉の十月、清盛が息子の右大将宗盛以下、平家錚々（そうそう）のメンバーを率いて、厳島神社に千人の僧を集めて、大法会を行った。これは、「伊都岐嶋千僧供養日記」（一巻・鎌倉時代書写・原本は昭和二十年八月六日広島の原爆で焼失）という古記録によって、詳細を知ることができるのだが、その中に、当時の厳島内侍たちの名が連ねてある。

（１）黒内侍、（２）竜樹内侍、（３）普賢内侍、（４）文殊内侍、（５）弥陀内侍、（６）万寿内侍、（７）多聞内侍、（８）釈迦内侍、（９）千歳内侍、(10)乙内侍、(11)地蔵内侍、(12)薬王内侍

以上、十二名。(B)の手紙に見える黒内侍や竜樹内侍は、その筆頭に見えるではないか。とすると、(B)に「彼の両人も同じく一双の美人なり」というのは、まさしく、二人が厳島内侍群の女王の座を占めていたものと知る。これら十二名の呼称が、一様に仏教臭をもっているのは、面白い。それにしても、美人中の美人に黒内侍とは、ずい分、皮肉な名をつけたものではないか。ともあれ、この(A)・(B)を含む四通の手紙は、すべて、この黒内侍に改名をすすめるもの。厳島随一の美形。あるいは、清盛御手付の女であったかも知れない、かの女に寄せる三人の切々の慕情をかいま見る思いではないか。